

日系アメリカ人の涙と汗 — 日系アメリカ人強制収容所の記憶 —

和田 治彦[†]

The Tears and Sweat of Japanese Americans: The Memories of Japanese American Internment Camp

Haruhiko Wada

はじめに

1964年に日本人の海外渡航がようやく自由化され、筆者は1968年から1970年の2年間、派米農業研修生としてアメリカの西海岸で生活する機会を得た。研修は大学での座学と農場実習から構成されており、直接アメリカ人社会と接するオレゴン、アリゾナでの農場生活で多くを学んだ気がする。

アメリカ農業は大型農業機械の導入で先進的な農業を行っているが、収穫作業などは一時期に集約的に労働者が必要となり、いまだにヒスパニック系の季節労働者に依存している。そんな農場で多くの人々と出会う機会に恵まれた。そして多種多様な民族から成り立っているアメリカ合衆国では、民族間のヒエラルキーが明らかに存在している事を知った。

そんな時、南カリフォルニアで果樹と野菜栽培を営む日系一世の農場主M氏に出会った。筆舌にて絶する苦労の末、自作地の農場オーナーとなった。ところが1941年12月7日の日本軍の真珠湾攻撃でアメリカ西海岸に住む「敵性市民」となった日系人12万人と共に強制収容され、すべてを失ってしまった。

筆者は米国から帰国後、青年海外協力隊のボランティア活動に参加し、アフリカで生活した。先進国アメリカと最貧国タンザニアの生活から、異文化と民族の多様性は、多少なりとも理解できるようになった。マジョリティの人々が理不尽な事で、彼等を困難に陥れる態度や行動は、看過できなかった。

筆者の世代は、終戦直後に日本が平和になった時に生を受けた800万人もいる世代（Baby Boomer）で、学生時代の1965年-1972年は全共闘運動、ベトナム反戦、安保闘争など反体制運動に染まっていた世代でもあった。日系人強制収容所のことを看過できないのは、団塊の世代が持つ

ているDNAのせいかもしれない。理不尽な日系人強制収容所の事を研究課題として選んだのは自然な流れでもあった。

1. 打瀬船（うたせぶね）

筆者が住む愛媛県は「移民県」ではないが、愛媛県の南部をつまみ南予は、多くのアメリカ移民の故郷となっている。南予地方の「打瀬船」と呼ばれる3本の帆で帆走する和船の一種で、1万1千キロも太平洋を横断し無謀ともいえる航海で北米に上陸した人々を出した地域である。

1912年（明治45年）5月5日、船長の吉田亀三郎をはじめとする5人が、住吉丸という打瀬船で川之石港（現・愛媛県八幡浜市）を出発した。彼等はシアトルを目指したが、76日後到着した場所は、2000キロも離れたサンディエゴ市北部の海岸だった。住吉丸の航海は、現在知られている限り、日本人が個人の船で自主的に成し遂げた最初の太平洋帆走横断と言われている。以後、合計6回に渡り打瀬船が太平洋を横断している。うまく逃げおおせた者以外は、全員上陸後日本に強制送還されているが、アメリカの新聞は「コロンブスのアメリカ大陸発見に匹敵」と小舟で太平洋横断を果たした彼等の行動を、驚くべき快挙として受け止めている。

打瀬船で危険を冒してまで密航を決行する動機は、渡米経験者が1907年の日米紳士協定以降の移民渡航制限のため、旅券の発給受給が困難になった事と、アメリカと日本の賃金格差という経済的理由とがあげられる。収入を得ると短期で引き揚げ帰国する出稼ぎの性格が強かったことも、打瀬船の渡航者の特徴である。

2. 移民法と日系人強制収容所の開設

日本人は勤勉で農業技術も高く、集約的栽培を行い成功

[†]2021年修了（人文学プログラム）

日系アメリカ人の涙と汗
— 日系アメリカ人強制収容所の記憶 —

する者が増えると、白人農業関係者は無視することが出来なくなり、排日運動に向かっていった。1924年7月1日に「1924年移民法」(Immigration Act of 1924)と呼ばれ施行されることになった。

12月7日の真珠湾攻撃の衝撃的なニュースは日系人のアイデンティティーを問われる日ともなった。開戦と共にFBIは約1500人の一世の日系人リーダーを逮捕し、全国に散らばる司法省管轄の施設や拘置所に送った。日本人と日系アメリカ人の銀行口座は、真珠湾攻撃の翌日から凍結されてしまい、家族の生活費が無く深刻な状況に直面する事となった。

アメリカ軍は戒厳令も発令されていないのに、西海岸地方は戦区であると宣言し西部防衛司令部が設立され、アメリカ市民である二世も含み、日本人を祖先に持つ者全員が対象になった。そしてついに1942年2月19日多くの日系人の運命を変えた「大統領行政命令第9066号」にローズベルトは署名したのである。

収容所はアリゾナ州南西部のポストン (Poston)、北カリフォルニア州のトゥールレーク (Tule Lake)、カリフォルニア州東中部のマンザナ (Manzanar) をはじめとする、10ヶ所の転住センター (Relocation Center) と呼ばれる収容所に移転させられた。「転住センター」と聞こえの良い呼び名だが、現実には周辺を鉄条網で囲まれ監視塔があり、「日系人を白人の暴力から守るため」という説明とは裏腹に、機関銃の銃口は外側でなく内側を向いていた。劣悪かつ過酷な自然環境が全収容所の共通点であった。

3. 強制収容所の生活

収容所は粗末なバラックで、共同便所と入浴施設は最小限しかなく、部屋の大きさは家族の人数に合わせて住居を当てがわれていた。隣接する家族間には簡単な仕切りがあるのみでプライバシーは無く、水道の設備も部屋には無く、陸軍スタイルの簡易ベッドがあるのみで家具は一切無かった。

食事は集団でとり、食事に供される野菜は、収容者自らが栽培し自給し、余剰の野菜は他の収容所に転送し利用していた。収容所は周囲に有刺鉄線が張られ、監視塔には武装していた兵士が監視し、夜間は投光器が照らされ24時間監視されていたが、学校、図書館、病院、新聞社、教会などはあった。収容者に収容所内の雑務や雑事をさせ給与を払うシステムだった。給与は職種に関わらず一律1カ月19ドルを上限とされていた。

4. 収容所内の新聞

12万人の日系人が収容された各収容所では英字、日本語の新聞が発行されていて図書館で自由に閲覧できた。内容は戦時転移局 (WRA) の通達情報、所内のコミュニティ・ニュース等を伝達していたが、WRAは、入念な検閲

を課して発行を許可していた。イベントの開催や各収容者の出産、訃報などの情報など、なくてはならないものになっていた。

WRAの収容所新聞の発行政策は、日系人編集者にある程度の裁量を与えつつも、当局の政策、目標に合致する範囲のみ認め、収容所の管理・運営を効率化するための情報伝達、また噂の防止や所内の秩序を保つ手段として利用するという実利的な理由があった。だが国内世論に対して収容政策の正当性を証明し、かつ対戦国のプロパガンダにも対抗しようという、もう一つの狙いがあった。

筆者は、合衆国議会図書館に保存されている当時の各収容所内の新聞を閲覧し、その事を確信できた。例えば、1945年1月1日発行のコロラド州グラナダ収容所の新聞『Granada Pioneer』 新年号の記事と、同じくコロラド州デンバーの日系人新聞『Rocky Shimpo』の新年号の記事の扱いが全く異質なものになっていた。

『Rocky Shimpo』新年号特集では、1944年に起こった10大ニュースで、ノルマンディー上陸作戦、ヒットラー暗殺未遂事件、B-29による日本本土爆撃開始、ドイツの新兵器V-1、V-2登場などを鮮明に記載していたが、収容所内の新聞は全くそれらには触れていない。「民主的」に日系人を強制収容することそれ自体に矛盾がともなう以上、外部社会と全く同質の「言論・報道の自由」が実現されるはずもなかった。

5. 日系人の声

ここからは筆者が直接インタビューを試みた事例や、米国在住の日系人に直接SMS、Face Time等のデジタル機器を駆使し遠隔取材した内容を紹介する。

5.1 Junzo Ideno氏 (出野順造・1901-1995)

今回の日系人の取材で、彼が全てのキーパーソンになっていて、筆者宅の古いアルバムにあった98年前の結婚式の写真が本研究の端緒となっている。



出野順造氏結婚式 1924年(大正13年)8月・桑港(サンフランシスコ)にて

出野順造氏は愛媛県松山市に生を受け、1919年（大正8年）18歳の時、3歳年下の妹 久子さんと共に両親がいるサンフランシスコに渡米。その時、両親はサンフランシスコの日本人街で日系人を相手に寿司店を経営していた。近くにあるサンフランシスコを代表する日本書店「青木大成堂」のオーナーで同郷の青木道嗣夫妻の媒酌で1924年（大正13）に結婚。二人の子ども授かり、昼間は書店で勤務し夜間は剣道に励み続け、最後は剣道を極めた者に与えられる7段教士の資格を得て、道場の指導者となった。

ところが人生はいつも順風満帆でなく、同郷の妻が第三子出産時に母子ともに亡くなり、1931年には頼りにしていた父親も病没してしまった。二人の子供たちは母親に預けていたが、その母親も孫に当たる子供二人の教育を考え、数年後には孫を連れて日本へ帰国してしまった。妻を亡くし子供たちと離れた寂しさから、剣道と趣味の和歌など日本の伝統文化に打ち込み、熱心な県人会活動を通じて、サンフランシスコの日系人社会のリーダーとなっていた。

日米開戦と同時にアメリカ連邦捜査局（FBI）に逮捕され、一般の日系人のような強制収容所ではなく、司法省管轄の抑留所に終戦まで拘束された。開戦と同時に即刻逮捕され母親と子供たちは日本にいたので、同じカリフォルニア州にいる姉妹とも連絡が出来ず、彼の所在は不明となり、戦後になって、テキサス州クリスタル・シティ（Crystal City, Texas）の抑留所に監禁されていたことがようやく判明した。

武道の剣道指導者であったことが、逮捕の理由だったが、日本語教師、新聞編集者、仏教の僧侶など、日系人社会の一世のリーダーたちも同じ運命をたどった。合衆国政府は、日系人の精神的支えになる人物との接触を制限しなかったのである。他の官吏をはじめ商社・銀行員、ジャーナリスト、学生、学者などは、一時期同じ司法省の抑留所で拘束されていたが、「日米交換船」で日本へ帰国できた。

彼は戦後解放されたが、身内の姉妹家族はアメリカ政府に対し忠誠をよしとしなかったため、ツールレイク収容所から1945年の終戦の年に、日本へ送還されていた。社交性のある出野氏は、日系人はもとよりドイツ人抑留者とも交流し、抑留所で多くの友人を得たと聞く。戦後はシカゴに移住しそこで事務職を見つけ終の住処とした。日本にいる長男は戦時下の旧制中学の最終年に日本の海軍に志願したが、無事に終戦を迎え、父の呼び寄せに応じアメリカに戻っている。「帰米二世」の典型的な例である。

その長男は、父親とは反対にシカゴからロサンゼルスに移り、父親同様に剣道を学び、吟詠をたしなみ、日系人コミュニティーのリーダーになり活躍した。南加愛媛県人会の重鎮として長らく奉仕し、2010年の会設立100周年記念事業の実行委員長を最後に現役を離れたが、2022年96歳で彼岸に旅立った。父親の出野順造さんは、シカゴでも日系人社会のリーダーとして活躍し、シカゴ剣道会を立ち上げ、和歌の指導、日本語の教師と、充実した日々を送

り、94歳の天寿を全うした。彼の遺言に従い分骨し、生まれ故郷松山の墓地で静かに眠っている。

5.2 宇都宮家（家族番号14610）

宇都宮福松さん（1898-1944）は、愛媛県西宇和郡真穴村穴井（現 八幡浜市穴井）の農家の末っ子として生を受けた。彼は渡米幹旋業者に一度はだまされ仕度金を失ったが、失敗にはひるまず太平洋の横断ではなく、西に回り大西洋を横断し米国東海岸からの入国のほうが、密入国しやすいという情報を得て、それを実行した。ヨーロッパ航路の船に密かに乗船し、蒸気船の石炭庫内に当初は隠れ、ロンドンに上陸した。人道上の理由から、航海途中で下船命令を受けることはなく、コックの見習いとして働き料理の腕を磨いた後、アメリカ向け大西洋航路にコックとして乗船し、ついに念願のニューヨークに上陸することが出来た。1924年5月のことだった。

第一次世界大戦後の好景気で、アメリカは活気を帯びていたが、「1924年移民法」の時期だったので、正式入国は困難だった。船長には無断で下船し逃亡を企てた。上陸後、日系人が多い西海岸を目指し、8年後サンフランシスコの日本人街で寿司屋を営む出野順造氏の父親のもとで働くこととなった。寿司店の先代が亡くなり、末娘の久子さんと結婚し寿司屋のオーナーとしての生活がスタートした。福松氏と所帯を持った宇都宮久子さん（1904-2001）は、出野家の末っ子として愛媛県松山市に生を受けた。サンフランシスコに住んでいた両親の呼び寄せで、兄順造と共に1919年（大正8年）15歳の時に神戸港より海を渡った。晩婚だったが5人の子宝に恵まれた。全ての運命を変えたのが、真珠湾攻撃だった。

宇都宮一家は、「宇都宮」から「家族番号14610」になり、戦時転移局（WRA）から割り当てられたその番号が記載された名札を体に付け、1942年の4月にタンフラン集合センターに一家は移動し、仮設バラック住宅の生活を強いられた。集合センターと言っても競馬場の厩舎が建てられ、裸電球一つしかなく太陽の光は入らず、馬糞の悪臭が漂う厩舎に身を置くこととなり、酷い環境だった。

5ヶ月の集合センターの生活の後、宇都家は行き先を告げられず列車に乗り込み1942年9月、着いたところは半砂漠の周囲は何もない、ユタ州のトパーズ（Topaz, Uta）強制収容所だった。トパーズ強制収容所は、1943年4月に愛犬の散歩をしていた、63歳のハツキ・ワカサ氏（一世）が有刺鉄線のフェンスの近くで、監視塔の歩哨兵にライフルで射殺された事件で知られている。

家長の福松氏は集合センターの生活中に体調を崩し、カリフォルニアで一人だけ残留し検査入院し胃癌と診断された。家族全員がトパーズ収容所で揃ったのは2ヶ月後の1942年11月のことだった。宇都宮家にとっては、さらなる試練が待っていた。日系人の忠誠登録質問で福松氏はNo-No組を選択したので、翌年の1943年9月末には、カリフォルニア州北部のツールレイク隔離収容所へ再移動を強

日系アメリカ人の涙と汗
— 日系アメリカ人強制収容所の記憶 —

いられる羽目となった。度重なる移動によるため体調が悪化した福松氏は、ついに1944年4月収容所内で、波乱に満ちた45歳の人生を閉じる事となった。1944年の1月1日の元旦に誕生したので、「正一」と名付けられた第5子の誕生を、見届けての旅立ちだった。

久子さんの姉も同じようにサンフランシスコの両親を頼り渡米。同じ愛媛県出身の男性と結婚し、日米戦争勃発後も二人は行動を共にしていた。姉夫妻とその4人の子供達も、若くして寡婦になった久子さん一家を支えて、1945年8月14日の終戦を迎えた。姉一家6人は、No-No組でもあり、日本へ帰国の道を選択し送還される事となったので、久子さん一家6人も迷わず、姉一家に追従し日本送還を選んだ。送還時の所持品は、一人一個、重さ60ポンド(約27Kg)の荷物しか許可されず、列車で二年間過ごしたツールレイク収容所を後にし、オレゴン州ポートランド港に集結したツールレイク収容所の3550名の日系人と、他の収容所からの送還者を乗せた船で年末に日本に向けて出港した。久子さんがアメリカに入国した1919年の15歳の時から、実に四半世紀ぶりに日本の土を踏むこととなり、久子さんは41歳となっていた。

敗戦国日本の荒廃は想像以上に酷く、日本に到着してすぐ洗濯乾燥していたオムツが根こそぎ盗難にあい、厳しい日本の現実を知る事となった。アメリカ生まれの子供達には市民権があり、1950年代にシカゴに住む伯父・出野順造氏を頼り、成長過程に合わせて順次アメリカに帰国した。その間の久子さんは、5人の子供達の教育と生計のため筆舌に尽くしがたい苦勞を戦後の日本で経験し生き抜いた。一足早くアメリカに帰国していた姉一家と、シカゴ在住の兄・順造氏の経済的援助もあり、カリフォルニア州より人種差別が少ないシカゴで、家族全員が揃ったのは1950年代後半のことだった。

「私達家族は、アメリカで差別を受け、日本に帰国しても差別を受けた」と心の内を吐露したシカゴ在住の久子さんの次女の言葉を、決して忘れることが出来ない。あれ程苦勞した久子さんだったが、晩年はその次女家族と共に幸せに生活し、曾孫や孫に囲まれて97歳の天寿をシカゴで全うした。

5.3 古能博氏 (1922-)

古能博さんはパサデナ (Pasadena, California) で、青果物を中心にスーパーマーケットを経営する父親の7人兄弟姉妹の次男として、1922年(大正11年)に生まれた。アメリカの小学校に入学したが、日本での教育を希望した両親の願いで7歳の時に弟、妹と共に、父の故郷愛媛県八幡浜市小網代地区の祖父母の元にあずけられた。

スーパーマーケットの商売は繁盛して比較的裕福だったので、養育費は毎月アメリカから送金された。パサデナの自宅は大きく二階建てだったが、日本の住居は小さく狭く、悪臭が酷い日本の便所には閉口して、アメリカとの差を子供ながらに感じたという。両親に会いたい気持ちが歳

と共に高まり、外国航路の船に乗れば米国にも寄港できると思い、旧制中学から東京商船学校航海科に進む。晴れてアメリカ行きの油槽船に乗船する機会が巡ってきて、ついに太平洋を渡りカリフォルニアの港に寄港した歳に、両親と数年ぶりの再会を果たすことが出来た。父親と夜を徹して語り明かし、早朝には再会を約束して乗船したが、終わりは突然やってきた。

乗船していたタンカーが日本海軍の燃料補給船として徴用され、砲弾設置や塗装も灰色に換える偽装工事をうけ、1941年秋には宿毛湾で訓練のあと北に向かった。着いたところ北海道の択捉島ヒトカップ湾だった。そこには空母、戦艦など多数の軍艦が集結して大演習でも始まるのかなと思いつつ、駆逐艦と共に補給隊も本隊を追従した。「12月8日未明、西太平洋上において米英と戦闘状態に入った」との大本営発表を聞き、真珠湾攻撃に参加した事を初めて知らされた。

攻撃成功と仲間達は歓喜で沸いていたが、古能博さんは日本がアメリカに勝利する姿は想像できなく、複雑な心境だった。アメリカが本気で戦えば、日本は負けるだろうとなんとなく感じたという。その後、珊瑚海戦、ミッドウェー海戦、ソロモン海戦にも参戦したが後方支援だったため被害は被らなかつた。しかし1943年3月にマカッサル海峡をシンガポールに向かっていた時、米潜水艦の魚雷攻撃を受け九死に一生を得た。博氏が21歳の時だった。

平穏な日々は長く続かず、徴兵検査の連絡が役場から届き、米国籍であることを告げると、刑事と特高警察から米国籍でなぜ真珠湾攻撃に参加したのか詰問を受けた。米国籍生まれの二世で幼少の時帰国し日本で教育を受け、商船学校の訓練生のまま乗船して今日に至った事を、説明しても理解してもらえなかつた。結局、強制的に米国籍を剥奪され日本国籍にされてしまった。

徴兵検査の後、中国本土の陸軍航空隊に配属の整備兵になり陸軍戦闘機「隼」の整備に従事した。戦況悪化と共に未帰還の若いパイロットが増え、戦争の空しさと、理不尽を痛感したという。敗戦は中国本土で知り、釜山経由で日本に戻り広島駅を通過した際、原爆の威力を見せつけられ愕然としたが、「負けて悔しかったというよりも、やはり負けてしまった」という複雑な思いだった。アメリカに勝てる道理がないと解っていたが、現実にいざそうなってみると、空しさのみが残り不戦の誓いを心に決めた古能氏だった。

米国の両親は、アリゾナ州のヒラ・リバー (Gila River, Arizona) 強制収容所に入れられ、そこで終戦を迎えた。

戦後の疲弊した日本で生きぬくため、働き続けた彼が父親と再会する機会は2度と訪れなかつた。父親も帰国することなくアメリカ人として生き、アメリカの土となった。真珠湾攻撃の生き証人として数奇な運命を辿った古能博氏は、100歳の現在も補聴器とは無縁で、規格外のお元気さである。

5.4 Tomitaro Shigematsu (重松富太郎・1883-1960)

最後に筆者の大叔父・重松富太郎のことを記しておく。今回の修論調査中、日系人の協力で思いがけず消息が判明した。筆者の父は婿養子で旧姓は重松だったが、父方の祖父の兄弟つまり大叔父・二人が明治末期に北米移民しニューメキシコ州で亡くなったという程度しか父からは聞いていなかった。

重松富太郎は1883年（明治16年）に愛媛県松山市の隣町、現在の伊予郡松前町で地主の次男として生を受けた。当時は長男が家長として後を継ぎ、次男、三男は外に職を求めるのが通例だった。富太郎の弟で三男の滝三郎（1887-1907）と共に、1903年（明治36年）春、神戸港よりアメリカ丸でサンフランシスコに向けて日本を後にした。富太郎20歳、滝三郎16歳の時だったが、1903年前後が日本人の北米移民が一番多い時期だった。日本人が多く住む通称Japantownで二人の北米での生活が始まった。ところが1906年（明治39年）4月、サンフランシスコを未曾有の大地震が襲った。その翌年には、いつも行動を共にしていた弟、滝三郎が20歳の若さで病没してしまう。弟を亡くした富太郎はロサンゼルスまで南下し、1920年（大正9年）故郷の松山出身の写真花嫁のチヨ子（1895-1992）と結婚した。

1907年と1908年にはアメリカの移民入国数はピークとなり3万人（1907年）、1万5千人（1908年）に達していたが、1908年に発令された日米紳士協定によって、日本人労働者の移民は制限された。しかし写真花嫁の流入は続いていたが、米国政府の圧力で日本政府は、1920年写真花嫁の旅券発給停止も認めてしまった。そんな社会事情から富太郎にとっては最後の結婚のチャンスで、富太郎37歳の時だった。その後一家はカリフォルニア州からアリゾナ州に移動し、さらにニューメキシコ州を終の住処としたのは、1930年の初頭だった。その間5人の子宝に恵まれ平穏に暮らしていたが、1941年の真珠湾攻撃の日から一家の生活は一変した。一家の当主の富太郎も「Tom」とニューメキシコの人々から呼ばれ順調に仕事も運んでいたが、日米開戦と共に14年間続いていた塗装業が廃業に追い込まれた。地元の人々から慕われていた一家は、収容所への移動は住民の反対運動で収容所生活は免れた。失職後、一家はニューメキシコ州の他の地に引っ越し、レタスとタマネギの農場を開いた。

長男と次男は戦争さえなければ、高卒後にカレッジ入学と希望を抱いていたが戦争は二人の夢を打ち砕いた。収容所送りを反対した地元の為にも、父親 富太郎は市民権を持っている息子達に、軍隊に志願しアメリカに忠誠して戦う道こそが、日系人の生きる道だと説いた。次男のジョージ（George.1922-1999）は高校を卒業すると同時に、日系二世から編成された名高い「442部隊」に志願し、ヨーロッパ戦線に参戦している。彼は1943年ミシシッピ州で訓練を受けた後、大西洋を横断しイタリアのナポリに上陸したのは1944年6月だった。ところが10月の戦闘中に負

傷し戦線離脱したが、その勇敢な戦いと負傷に対し、パープルハート章（Purple Heart）を授与している。442部隊の9486人がパープルハート章（日本語では名誉負傷章、名誉戦傷章、名誉戦死傷章などとも訳される）を獲得し、アメリカ合衆国史上もっとも多くの勲章を受けた部隊としても知られている。

おわりに

今年は、強制収容所開始から丁度80年目の年になる。また81年目になる真珠湾攻撃（1941）年の真珠湾攻撃に参加したアメリカ生まれの元婦米二世の100歳の古能博士（1922-）に直接お会いして取材できたのは幸運だった。他シカゴ、カリフォルニア、テキサス州の各日系人の方々に、資料の提供と取材に協力していただき、深く感謝している。

強制収容所を体験している一世は生存してはなく、二世の方々も80歳以上のご高齢になっている現在、日系人にとっては辛い負の体験と記憶の取材には非協力的だろうと思っていたが、それは杞憂にすぎなかった。実名記載で良いから、真実を伝えて欲しいと収容所体験者から逆に励まされた。体験者の世代が少なくなり、今では三世、四世の世代になり、歴史上から忘れ去られようとする今こそ伝承しなければならぬという思いからか、取材には本当に快諾、協力していただいた。

総括して言える事は、酷い差別を受け苦勞したにもかかわらず一、二世の方は、意外と長寿の方が多いのが目立つ。祖国日本を離れ、異国で生き抜かならぬ気概と不転の決心がそうさせたのだろうか。東アフリカ時代に接した孤高のマサイ族は、厳しい自然環境に耐え抜いた者のみ子孫を残すことが出来る。日系人は厳しい経済、社会的ハンディを克服し、強いレジリエンスを持ち合わせている方々が多く、つい両者が重なってしまう。

最後に、古希をとくに過ぎた老学生を御指導くださった宮本陽一郎先生、ミカン農家の繁忙期にも関わらず筆者を支え続けた妻、プライベートな情報も御提供していただいた日系アメリカ人、他すべての方々には、「感謝」の言葉以外見当たらない。



日系人強制収容所を体験した二世、三世と四世達の笑顔
提供 Ms. Kimi Kimura 2021年春 シカゴにて

参考文献

- R・ウィルソン, B・ホソカワ 『ジャパニーズ・アメリカン』
有斐閣 1982年
- ロジャー・ダニエル 『罪なき囚人たち』 南雲堂, 1997年
- 南加愛媛県人会編 『南加愛媛県人会75周年記念誌』 南加愛媛県人会, 1985年
- 南加愛媛県人会・愛媛県海外協会編 『南加愛媛県人会100周年記念誌』 南加愛媛県人会, 2010年
- Japantown Task Force Inc. *San Francisco's Japantown*. Arcadia Publishing, 2005.
- Nihei, Wesley. *Executive Order 9066*. NJAHS, 2017.
- Sugimura, Tukasa. *Quiet Heroes*. Intentional Productions, 2014.
- Takaki, Barbara. *A Question of Loyalty*. Shaw Historical Library, 2005. 75-97.

図2 Tule Lake 隔離強制収容所の略図

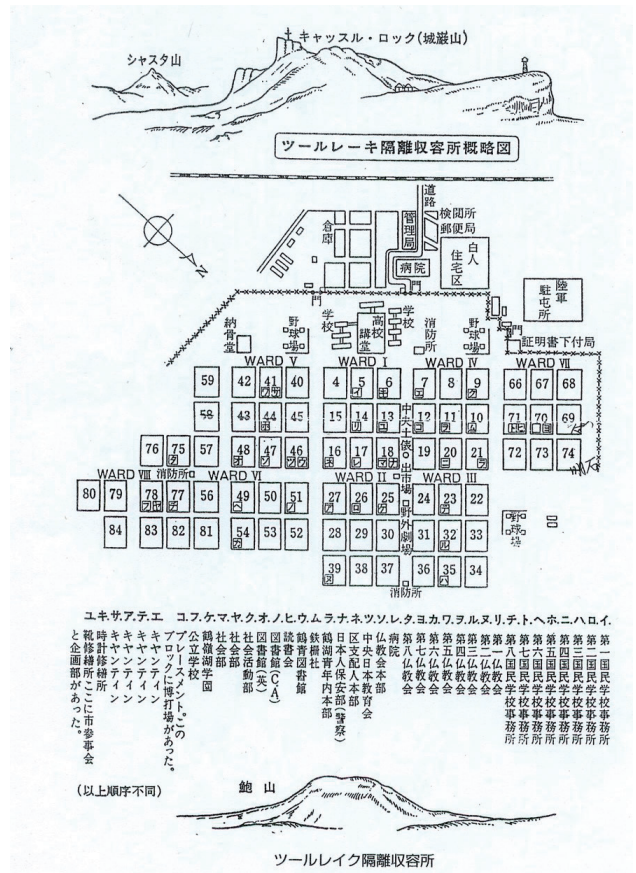
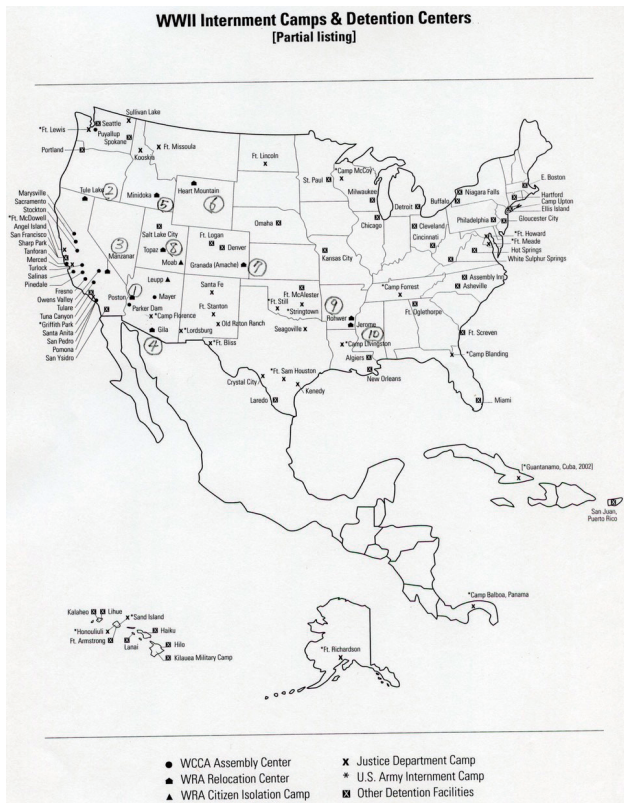


図1 全米の強制収容所と拘置所の設置場所 (1941-1945)



出典: National Japanese American Historical Society (NJAHS)
番号順に全米 10ヶ所に開設された日系人収容所。
×印は開戦時、日系人一世のリーダーが拘束された司法省管轄の拘置所。

出典: Tule Lake Committee



出典: Tule Lake Committee

Tule Lake 強制収容所全景。後方の山は鮑山、最大時1万8千人収容。



筆者撮影

現在の Tule Lake 収容所跡地。合衆国・国定史跡に指定されている。後方の山、キャツスル・ロックのみ当時の姿を残している。